

Quark Mixings in  $SU(6) \times SU(2)_R$  and Suppression of  $V_{ub}$ 

松田 正久\*(愛知教育大)、松岡 武夫(皇學館大)

## 概要

The quark mixing matrix  $V_{CKM}$  is studied in depth on the basis of superstring inspired  $SU(6) \times SU(2)_R$  model with global flavor symmetries. The sizable mixings between right-handed down-type quark  $D^c$  and colored Higgs field  $g^c$  potentially occur but no such mixings in up-type quark sector. In the model the hierarchical pattern of  $V_{CKM}$  is understood systematically. It is shown that due to large  $D^c$ - $g^c$  mixings  $V_{ub}$  is naturally suppressed compared to  $V_{td}$ . It is pointed out that the observed suppression of  $V_{ub}$  is in favor of the presence of  $SU(2)_R$  gauge symmetry but not in accord with generic  $SU(5)$  GUT.

以下の話は、主として Ref.[1] によっている。クォーク・レプトンの質量と混合行列の特徴として (1) $V_{CKM}$  は単位行列ではないが、ほとんど 1 に近い (レプトンセクターの  $V_{MNS} \simeq$  Bi-maximal), (2) クォークの up-と down-type の間には階層性 ( $m_u/m_d \simeq 0.2 - 0.8 < m_c/m_s \simeq 7 - 18 < m_t/m_b \simeq 38 - 45$ ) がある。一般に GUT から期待される混合行列の構造は up-と down-type は、大きなゲージ群の同一の規約表現に入ることから、 $V_{CKM}$  は厳密に単位行列となることが期待される (実験的には 1 ではない)。一方全然別の規約表現に入るとすれば up-と down の湯川結合が独立となり、 $V_{CKM}$  は大きな非対角要素をもつことが期待される。これは実験事実  $V_{CKM} \sim 1$  と大きく異なっている。実際には単位行列に近い  $V_{CKM}$  は非対称性であって、

$$V_{CKM} \sim \begin{pmatrix} 1 & \lambda & \lambda^4 \\ \lambda & 1 & \lambda^2 \\ \lambda^3 & \lambda^2 & 1 \end{pmatrix}, \quad \lambda = 0.22$$

である。この非対称性は、 $V_{MNS,e3} \ll 1, V_{MNS,\tau 1} \sim \mathcal{O}(1)$  のようにレプトンにも共通している性質かもしれない。ここでは特に  $V_{CKM,ub}$  が  $V_{CKM,td}$  に比べ抑制されている事実 [2] に注目する。すなわち  $|V_{td}| \simeq |V_{cd} \cdot V_{ts}| \simeq \lambda^3$ 、 $|V_{ub}| \simeq \lambda |V_{cb} \cdot V_{us}| \simeq \lambda^4$ 、 $|V_{ub}/V_{cb}| = 0.08 \pm 0.02 \simeq \lambda^2$  であり、これらの特徴を如何に理解すべきかについて、string inspired model の枠組みの中で  $SU(6) \times SU(2)_R$  模型 [3] で分析した。

この模型では物質場は 27 次元に属し、ここでは、これを世代数に合わせ 3 組 ( $\Phi_{1,2,3}$ ), また一組の  $27(\Phi_0) - \overline{27}(\overline{\Phi})$  を考える。27 次元の内訳は

$$\Phi(27) = \begin{cases} \phi(15, 1) & : Q, L, g, g^c, S, \\ \psi(\overline{6}, 2) & : (U^c, D^c), (N^c, E^c), (H_u, H_d), \end{cases}$$

であり、 $R$ -Parity は  $\Phi_{1,2,3}$  に対し  $\ominus$ 、 $\Phi_0, \overline{\Phi_0}$  に対し  $\oplus$  とする。この模型の特徴は colored Higgs の  $g, g^c$  と  $SU(2)_L$  doublet Higgs の  $H_u, H_d$  が、 $SU(6)$  の異なる規約表現に入っていることから triplet-doublet 問題が最初から解決されていることであ

\*報告者

る。また、 $N^c$  は right-handed neutrino,  $S$  は  $SO(10)$ -singlet である。ゲージ対称性の破れは、

$$G = SU(6) \times SU(2)_R \xrightarrow{\langle S_0 \rangle} SU(4)_{PS} \times SU(2)_L \times SU(2)_R \xrightarrow{\langle N_0^c \rangle} G_{SM}$$

となる。ここで、 $\langle S_0 \rangle = 10^{17 \sim 18} \text{GeV}$ ,  $\langle N_0^c \rangle = 10^{15 \sim 17} \text{GeV}$  を仮定する。こうして、 $SU(6) \times SU(2)_R$  不変な superpotentia を構成し、質量行列を求めることができる。また、質量行列の階層性の源として、Froggatt-Nielsen Mechanism[4] を用い、flavor symmetry として global  $U(1)_F$  を  $M_S$  のエネルギー領域で仮定する。この対称性のもとで質量行列  $M_{ij} Q_i U_j^c H_{u0}$  となる。ここで  $M_{ij} = m_{ij} \left(\frac{\langle X \rangle}{M_S}\right)^{b_{ij}} = m_{ij} x^{b_{ij}}$  で与えられ、 $m_{ij} = \mathcal{O}(1)$  かつ  $\text{rank}(m_{ij}) = 3x \equiv \langle X \rangle / M_S < 1$  である。

この模型の特徴として、 $\langle N_0^c \rangle$  より下のスケールで  $D^c - g^c$ ,  $L - H_d$  混合が可能であり[?], これは  $U^c$  にはない。

Up-quark の質量行列は

$$M = \begin{pmatrix} m_{11}x^{\alpha_1+\beta_1} & m_{12}x^{\alpha_1+\beta_2} & m_{13}x^{\alpha_1} \\ m_{21}x^{\alpha_2+\beta_1} & m_{22}x^{\alpha_2+\beta_2} & m_{23}x^{\alpha_2} \\ m_{31}x^{\beta_1} & m_{32}x^{\beta_2} & m_{33} \end{pmatrix} \quad (\alpha_1 > \alpha_2 > \alpha_3 = 0, \beta_1 > \beta_2 > \beta_3 = 0)$$

であり、 $M^{diag} = \nu_u^{-1} M U_u$  に従い固有値を求めると

$$m_u \simeq x^{\alpha_1+\beta_1} \left| \frac{\det M_0}{\Delta(M_0)_{11}} \right|, \quad m_c \simeq x^{\alpha_2+\beta_2} \left| \frac{\Delta(M_0)_{11}}{m_{33}} \right|, \quad m_t \simeq |m_{33}|$$

が求まり、ここで  $(M_0)_{ij} = m_{ij}$ ,  $\Delta(M_0)_{ij}$  は、 $M_0$  の  $(ij)$  成分の余因子である。また二重項に対する対角化行列は

$$\nu_u \simeq \begin{pmatrix} 1 - \mathcal{O}(x^{2(\alpha_1-\alpha_2)}) & -x^{\alpha_1-\alpha_2} \left(\frac{\bar{m}_{21}}{\bar{m}_{11}}\right)^* & x^{\alpha_1} \frac{m_{13}}{m_{33}} \\ x^{\alpha_1-\alpha_2} \frac{\bar{m}_{21}}{\bar{m}_{11}} & 1 - \mathcal{O}(x^{2(\alpha_1-\alpha_2)}) & x^{\alpha_2} \frac{m_{23}}{m_{33}} \\ x^{\alpha_1} \frac{\bar{m}_{31}}{\bar{m}_{11}} & -x^{\alpha_2} \left(\frac{m_{23}}{m_{33}}\right)^* & 1 - \mathcal{O}(x^{2\alpha_2}) \end{pmatrix}$$

となる。ここで  $\bar{m}_{ij} \equiv (M_0^{\dagger-1})_{ij} = \left(\frac{\Delta(M_0)_{ij}}{\det M_0}\right)^*$  である。 $\nu_u$  の第一列は  $\vec{M}_1$  ( $\vec{M}_i$  は  $M$  の  $i$ -th row vector) に比例している。

次に Down-quark の質量行列を議論する。ここで特徴的なのは、 $D^c - g^c$  混合が生じ、これが  $V_{CKM}$  に大きな影響を与えることである。これを以下で考察する。

$$\widehat{M}_d = \begin{matrix} & g^c & D^c \\ \begin{matrix} g \\ D \end{matrix} & \begin{pmatrix} y_S Z & y_N M \\ 0 & \rho_d M \end{pmatrix} \end{matrix}$$

ここで、 $Z_{ij} g_i g_j^c \langle S_0 \rangle$ ,  $M_{ij} g_i D_j^c \langle N_0^c \rangle$ ,  $M_{ij} Q_i D_j^c \langle H_{d0} \rangle$  である。これを  $\widehat{M}_d^{diag} = \widehat{\nu}_d^{-1} \widehat{M}_d \widehat{U}_d$  に従い対角化する。ここで二重項の対角化に関係する  $\widehat{\nu}_d$  は

$$\widehat{\nu}_d \simeq \begin{pmatrix} \mathcal{W}_d & -\epsilon(A+B)^{-1} B \mathcal{V}_d \\ \epsilon B(A+B)^{-1} \mathcal{W}_d & \mathcal{V}_d \end{pmatrix},$$

、ここで  $A = y_S^2 Z Z^\dagger$ ,  $B = y_N^2 M M^\dagger$  である。この対角化の手続きは省略するが、軽いセクターの固有値はそれぞれ

$$m_d \simeq \frac{x^{\alpha_1 + \beta_1}}{\sqrt{|\bar{z}_{11}|^2 + |\bar{m}_{11}|^2}},$$

$$m_s \simeq x^{\alpha_2 + \beta_1} \frac{\sqrt{|\bar{z}_{11}|^2 + |\bar{m}_{11}|^2}}{\left\| \begin{array}{cc} \bar{m}_{11} & \bar{z}_{11} \\ \bar{m}_{21} & \bar{z}_{21} \end{array} \right\|},$$

$$m_b \simeq x^{\beta_1 - \alpha_1 + \alpha_2} \frac{|\det M_0 \cdot \det Z_0| \cdot \left\| \begin{array}{cc} \bar{m}_{11} & \bar{z}_{11} \\ \bar{m}_{21} & \bar{z}_{21} \end{array} \right\|}{\sqrt{\left\| \begin{array}{ccc} \bar{z}_3 & \bar{m}_2 & \bar{m}_3 \end{array} \right\|^2 + x^{-2\eta} \left\| \begin{array}{ccc} \bar{m}_3 & \bar{z}_2 & \bar{z}_3 \end{array} \right\|^2}},$$

となり、Down-quark ( $Q_L$ ) の対角化行列は

$$V_d \simeq \begin{pmatrix} 1 - \mathcal{O}(x^{2(\alpha_1 - \alpha_2)}) & -x^{\alpha_1 - \alpha_2} a_{21}^* & x^{\alpha_1} a_{13} \\ x^{\alpha_1 - \alpha_2} a_{21} & 1 - \mathcal{O}(x^{2(\alpha_1 - \alpha_2)}) & x^{\alpha_2} a_{23} \\ x^{\alpha_1} a_{31} & -x^{\alpha_2} a_{23}^* & 1 - \mathcal{O}(x^{2\alpha_2}) \end{pmatrix}$$

となる。ここで  $a_{21}, a_{13}, a_{31}, a_{23} = \mathcal{O}(1)$  である。ここで、 $V_d$  の第三列は、 $\vec{M}_1 \times \vec{Z}_1$  に比例することに注意しよう。

以上の手続きから、 $V_{CKM}$  を求め、

$$V_{CKM} = V_u^{-1} V_d$$

$$\simeq \begin{pmatrix} 1 - \mathcal{O}(x^{2(\alpha_1 - \alpha_2)}) & -x^{\alpha_1 - \alpha_2} c_{21}^* & 0 \\ x^{\alpha_1 - \alpha_2} c_{21} & 1 - \mathcal{O}(x^{2(\alpha_1 - \alpha_2)}) & x^{\alpha_2} c_{32}^* \\ x^{\alpha_1} c_{31} & x^{\alpha_2} c_{32} & 1 - \mathcal{O}(x^{2\alpha_2}) \end{pmatrix}$$

ここで、 $c_{21}, c_{32}, c_{31}, c_{32} = \mathcal{O}(1)$  である。ここで  $V_{ub} \propto \vec{M}_1 \cdot (\vec{M}_1 \times \vec{Z}_1) = 0$  となることに注意しよう。この混合行列を数値的に見積ると  $V_{CKM}$  の観測値とクォークの質量を用いて  $V_{us} \simeq x^{\alpha_1 - \alpha_2} = \mathcal{O}(\lambda)$ ,  $V_{cb} \simeq x^{\alpha_2} = \mathcal{O}(\lambda^2)$  かつ  $x^{\alpha_1} \sim \lambda^3$ ,  $x^{\alpha_2} \sim \lambda^2$  となる。 $m_u \simeq m_d \simeq x^{\alpha_1 + \beta_1} = \mathcal{O}(\lambda^7)$  を用いて  $x^{\beta_1} \sim \lambda^4$ ,  $m_c \simeq x^{\alpha_2 + \beta_2} = \mathcal{O}(\lambda^4)$  より  $x^{\beta_2} \sim \lambda^2$  となるので

$$V_{CKM} \simeq \begin{pmatrix} 1 - \mathcal{O}(\lambda^2) & \sim -\lambda & \sim 0 \\ \sim \lambda & 1 - \mathcal{O}(\lambda^2) & \sim \lambda^2 \\ \sim \lambda^3 & \sim \lambda^2 & 1 - \mathcal{O}(\lambda^4) \end{pmatrix}$$

となつて、 $m_s \sim \lambda^6$ ,  $m_b \sim \lambda^3$  が得られる。また、質量比として

$$\frac{m_d}{m_u} : \frac{m_s}{m_c} : \frac{m_b}{m_t} = \mathcal{O}(1) : \mathcal{O}(\lambda^2) : \mathcal{O}(\lambda^3)$$

を得る。一次の近似では  $V_{ub} \simeq 0$  で、次のオーダーから  $V_{ub} \simeq x^{\alpha_1 + 2(\beta_1 - \beta_2)} c_{13} \simeq \lambda^5$  となる。しかしこれは実験の  $\lambda^4$  には少し合わない。 $M_S$  のスケールでの  $D$  と  $U$  に対す

る同じ質量行列  $M$  は繰り込み群の効果が  $up$  と  $down$  でお互い異なるので、低エネルギーでこの直交性ははずれることが予想される。したがって、Yukawa Coupling に対する補正が leading term に対して 10% 程度あれば、低エネルギーでは、 $\nu_u, \nu_d$  への補正は、こちらが主になることが予想される（現在解析中）。

$S(6) \times SU(2)_R$  模型で  $V_{CKM}$  を解析し、 $V_{CKM}$  の構造、とりわけその非対称性 ( $V_{td} \gg V_{ub}$ ) に、 $D^c - g^c$  混合が重要な役割を果たしていることが明らかになった。また、sum rule として、 $V_{td} = V_{cd} \cdot V_{ts}$  も得られた。これらの結果は、この模型において (1)  $\widehat{M}_d$  の ( $D - D^c$ ) 部分行列  $M$  は、up-type quark の質量行列  $M$  と同じであり、(2)  $\widehat{M}_d$  の ( $D - g^c$ ) 部分行列は 0 であり、(3)  $|\langle N_0^c \rangle| \gg |\langle H_{d0} \rangle|$  のもとで、 $D^c - g^c$  の大混合が起きることが条件である。今後の課題として、(1) 繰り込み群を用いて低エネルギーでの  $V_{CKM}$ 、とりわけ  $V_{ub} \simeq \lambda V_{td}$  の再現性を解析し、(2) 本稿では扱っていない、 $CP$  対称性の破れの解析を行うこと、(3) この模型では同様にしてレプトンセクターの質量と混合行列を得ることができる。この場合 down-sector と同様に  $L - H_d$  混合が起こり、またニュートリノでは、 $15 \times 15$  の質量行列と混合行列を解くことになる。しかし、質量行列が Froggatt-Nielsen 機構により階層性をもつので、これを利用して解くことができると考えている [6]。この場合の  $V_{MNS}$  を検討し、現在の実験と比較することによる  $S(6) \times SU(2)_R$  模型の妥当性の検討 [6] などである。

## 参考文献

- [1] M. Matsuda and T. Matsuoka, Phys. Lett. **B87** (2000) 104.
- [2] Particle Data Group, C. Caso et. al., Eur.Phys.J. **C3**, (1998) 1-794.
- [3] N. Haba, C. Hattori, M. Matsuda and T. Matsuoka, Prog. Theor. Phys. **96**, (1996) 1249.  
N. Haba and T. Matsuoka, Prog. Theor. Phys. **99**, (1998) 831.  
T. Matsuoka, Prog. Theor. Phys. **100**, (1998) 107.
- [4] C. Froggatt and H. B. Nielsen, Nucl. Phys. **B147**, (1979) 277.
- [5] J. Hisano, H. Murayama, T. Yanagida, P.R. **D49** (1994) 4966.
- [6] M. Matsuda and T. Matsuoka, in preparation.